

## 資料：環境学習セミナーなどの概略史 2

### 雑穀標本および保存種子の移管

東京学芸大学環境教育研究センターには、武井尚先生と東京腊葉会会員が整備した武井コレクションと東京腊葉会の標本約 3 万点を残した。インド亜大陸、中央アジア他の海外学術調査で、小林往央、木俣美樹男らが収集した標本および雑穀の栽培試験標本は山梨県小菅村の中央公民館に移管し、整理を続け、一般公開に供することにした。運搬は、大雪で遅れたが、2014 年 3 月 5～6 日に実施した。また、雑穀種子の保存系統の一部は海外収集品のため逸出することを防ぐために焼却し、他の一部は神奈川県相模原市のトランジション・タウン藤野お百姓クラブに 2014 年 3 月 30 日に 移管して、農業法人藤野倶楽部にローカル・シー ド・バンクを設置した。

### 源流祭り展示解説

展示解説は、研究員西村俊と木俣美樹男が行い、2014 年 5 月 4 日に実施した。

### 雑穀栽培講習会

伝統知伝承顧問の岡部良雄、研究員井村礼恵 および黒澤友彦が 2014 年 5 月 10 日に実施した。その後の栽培管理は黒澤が行った。収穫物はトランジション・タウン藤野お百姓クラブに寄贈した。

## 第 34 回環境学習セミナー

テーマ： 都市民が学ぶ山村の伝統的知識～トランジション・タウンと山村をつなぐ雑穀街道

趣旨： 日本には全国にドイツ村、スペイン村などがありますが、「日本村」はありません。私たちは 30 年余りにわたって、日本村を再生するエコミュージアム活動をしてきました。この国の伝統的な生活文化を学ばなければ、国籍だけの日本人にすぎません。山住みの縄文文化の系譜はこのくにの生活・生業の基層にあります。自然にかかわる暮らしを学び伝えることが、このくにを過去から未来に持続させうる秘訣です。「さあ日本村」は、鎌倉幕府に有事がある際に、御家人が鎌倉街道をはせ参じる「いざ鎌倉」のパロディーです。鎌倉街道は村々から都会に向かう道路網です。今でも東京都道 18 号線や神奈川県道 21 号線は鎌倉街道とも呼ばれています。このセミナーでは都会から山村に向かう道として、「転生」鎌倉街道を「雑穀街道」として提案します。

トランジション・タウンづくりの活動は、神奈川県藤野町(旧)から、鎌倉など湘南へ、小金井など多摩へ、さらに都留など甲斐へと進展 してきています。これらのトランジション・タウンをつなぐのが雑穀街道です。

日時：2014 年 11 月 8 日(土) 場所：山梨県小菅村 中央公民館 主催：自然文化誌研究会、ECOPLUS 共催：エコミュージアム日本村/ミュージアム研究会、トランジション・タウン藤野 後援：小菅村、日本雑穀協会、トランジション・ジャパンほか 宿泊：ご希望があれば、旅館、民宿、木下キャンプ場などを紹介 申し込み先：自然文化誌研究会(木俣)  
日程： 9:45 村内案内の希望者は小菅の湯駐車場に 集合 10:00 ~ 11:30 エコミュージアム日本村/ 植物と人々の博物館などの案内 11:30 ~ 12:45 昼食、小菅の湯レ

ストラン（各自、雑穀メニューほか） 13:00 ~ 17:00 1. 挨拶：中込卓男（自然文化誌研究会代表理事） 2. 提案 雑穀街道を創ろう：木俣美樹男（植物と人々の博物館） 3. 実践報告 1) トランジション・タウン藤野のローカル・シード・バンク：末村成生（TT 藤野お百姓クラブ） 2) 上野原市鶴川流域の地産品振興：白井誠一（NPO 法人さいはら） 3) 小菅村における雑穀の商品開発：古菅芳勝（小菅の湯） 4) 南魚沼、栃窪での棚田実践：大前純一（ECOPLUS） 4. 座談会 17:30 ~ 交流会（宿泊希望者）  
○連携行事：種市 2014 年 11 月 9 日、藤野にて研究員木俣美樹男が「雑穀街道」について講義した。トランジション・タウン藤野お百姓クラブは、ローカル・シード・バンクの保存種子、宮本透と木俣美樹男らが藤野で 30 年ほど前に収集したアワとキビ各 1 系統を播種、栽培復活に成功した。これらの展示と加工調整の実習も行われた。

### 第 35 回環境学習セミナー：東京学芸大学探検部創立 40 周年記念～環境学習の源流から未来へ

1975 年に自然文化誌研究会が大学のサークルとしてスタートし、冒険探検部との合併を経て、NGO（任意団体）から NPO（特定非営利活動法人）となって現在に至るまでに、実に 40 年以上の年月が流れました。その間に東京都小金井市、東京都五日市、埼玉県大滝村、山梨県小菅村を活動拠点として、北は北海道から南は沖縄、海外のタイと東奔西走、あっちに行ったり、こっちに行ったりと、自然・文化・冒険をキーワードに活動してきました。「未来を担う子供たちのために」「かけがえのない自然」と「先人たちが培ってきた文化」をきたまま手渡しできるようにという副題をつけて、「自分たちの知的好奇心を満足させ」つつ、「フロンティアワーク」を目指して試みを続けてきました。今でこそ環境・自然・文化というキーワードは巷にあふれ、手垢まみれとなっていますが、こちらら誰も見向きもしなかった時代から自然や文化にこだわって関わり続けてきた身なので、自然と文化をテーマにした私たちの活動に自負がないといえば、うそになります。しかし、とにかく過去を振り返ったり、反省したりすることが苦手でしたし、自分の足元のちょっと前あたりを見つめて、ただただ前に進んできた感のある本会です。関わる時期や時間に違いはあるにせよ、いろいろな人たちが 40 年の間活躍してきましたが、これまで先のことは考えても、過去のことはほとんど顧みることがありませんでした。誰一人として……。創設 40 年を記念して、ここらでいったん自分たちのやってきたことを振り返って、未来へ向けた糧としようではないかという意見から、今回のセミナーの開催となりました（こういう意見が出され、しかも開催されること自体、本会のメンバーが年をとった証拠なのかもしれませんね）。当日は懐かしいメンバーが集まりました。セミナーの中では、それぞれの活動がスライドや写真を交えて紹介され、当時の考え方や思いを振り返ってもらいました。本会の誕生秘話やこぼれ話をふまえて、木俣先生には「自然・文化」、塚原氏には「冒険」という切り口から、本会の活動の背景を解説していただきました。そして小菅村の亀井氏とともに、「小菅村の中で自然文化誌研究会が今後どのような活動ができるか」が話し合われました。「私たちの会は心根の部分はちっとも変わらないし、これからも変わらんのだろうな」という思いを強くしたセミナーでした。

民族植物学ノオト 第 10 号 38 【プログラム】 日時：2015 年 10 月 10 日（土）会場：植物と人々の博物館（山梨県小菅村中央公民館） 13:00 ~ [第 1 部] 源流を探る・

ふりかえる（司会進行：中込卓男）・探検部草創期（1975年頃）：中込卓男、柴田一・子どものための冒険学校・五日市時代（1988年頃）：佐藤雅彦・大滝村・エコミュージアム（1990年代）：小川泰彦・タイ環境学習キャンプ（1990年代）：中込貴芳・ぬくい少年少女農学校～ちえのわ農学校（2001年頃）：菱井優介・小菅村～現在（2004年頃）：黒澤友彦 16：00～ [第2部] どのような未来へ行くか？（司会進行：中込貴芳）基調講演・亀井雄次氏（小菅村商工会・観光協会・自然文化誌研究会理事）・塚原東吾氏（冒険探検部創設者）・木俣美樹男（自然文化誌研究会 学芸大学探検部創設者） 19：00～朝まで宴会（小菅村の船木民宿にて）

### 第36回環境学習セミナー「明日の小菅を探る」～持続可能な地域社会の再検討～

1. はじめに 過疎高齢化や限界集落などの悲観的な用語が世間を飛び交うなかで、日本の山村は多くの課題を抱えながらも、素のままの美しい暮らしを、今に継承してきた。現在、人口700人余の小菅村でも、「源流の郷」や「エコミュージアム日本村」など、以前から多くの村づくりの取り組みがなされている。源流の郷（小菅村発）、エコミュージアム（フランス発）、トランジションタウン（イギリス発）、美しい村連合（フランス発）の4つの代表的事例から、その活動経験を学び、地方消滅論を再検討し、これを克服する方策を探ることにした。

#### 2. 地域社会づくりの経験 1) 趣旨説明と挨拶 ー青柳諭（ミューゼス研究会代表）

ミューゼス研究会は、日本の山村に伝承されてきた知識を調査し、伝統的知識・技能を学び、環境保全・創造する活動を通じて、持続可能な地域社会をめざす「エコミュージアム日本村」づくりを平成18年から行っている。成果を活かして8集落の散策マップを制作し、道の駅などにおいて来訪者に提供している。今回のセミナーは、「源流」をキーワードにして地域づくり、村づくりを行っている小菅村において、源流の郷、トランジションタウン、美しい村連合の3代表から報告と、全国的に話題になっている地域消滅論についての講演をいただき、全国の山村が直面している課題等を検討する機会となればと思っている。

#### 2) 源流の郷小菅村 ー佐藤英敏（小菅村教育長）

小菅村は、昭和62年の「多摩源流まつり」の開催を機に『源流の郷』を意識したむらづくりを展開してきた。それは、小菅村が首都圏を流れる多摩川の源流域に位置するという現実からであった。多摩川流域には、400万人を超える住民が暮らし、その流域と交流と連携を深めようというものであった。山々を源とする清流は、山郷を潤し、そのあちこちに生業が広がり、豊かな源流文化を育んできた。源流には、先人から受け継がれた「技」や「知恵」が存在している。こうした人間社会の源こそ、源流にほかならない。21世紀は、源流が輝き源流が大切にされる環境の時代だと思う。小菅村は、源流の価値や魅力を前面に出し、源流にこだわり源流を活かした村づくりを展開している。環境の時代、持続可能な社会へのヒントは源流にある。便利さに依存しすぎてはいけない。源流という用語は1986年から使い始め、源流そば、源流の郷協議会、源流大学などの活動を進めてきた。また、東京都狛江市いかだレースなど、多摩川流域住民と交流を進めてきた。

#### 3) 全国のトランジションタウン活動と藤野の例 小山宮佳江（NPO法人トランジション・ジャパン共同代表／トランジション藤野メンバー）

トランジション活動は、持続可能な暮らしを地域の仲間たちとともに創り出す活動。地域の資源を見直し、身の丈にあった「できること、やりたいこと」をしながら、人と人が楽しくつながることで息の長い活動を行い、シフトした地域を増やすことで、持続可能な社会の実現を目指している。丁寧な暮らしと、環境とひとりひとりが尊重される社会の創造。世界をはじめ日本各地にこのトランジションタウンという活動のしくみが広がっている。相模原市旧藤野町では、知恵、心、実践、また自発性、内発性を大事に、無理をしないで人々をつなぐボランティアな活動をしている。リーダーを固定していない。やりたい気持ちを大切に、自発性だけでもなんとか活動を続けることができている。

4) 「日本で最も美しい村」連合が目指す地域 社会の未来 杉 一浩 (NPO 法人「日本で最も美しい村」連合 常務理事)

NPO 法人「日本で最も美しい村」連合は本年設立 10 周年を迎え、6 月には北海道美瑛町での総会・戦略会議の開催に合わせて、「世界で最も美しい村」連合会の総会を開いた。連合組織の原点は、入会合否の資格審査があることと相互に学び合う場を提供することで、自立の村づくりを目標に据えて、成熟社会の持続的地域モデル構築を目指している。加盟町村の人口減を食い止めて持続的な美しい村を実現、地域資源を未来に継承するためには、経済的な自立と住民自治が 2 本柱。54 の加盟町村には多様な分野ですぐれた先進事例を持った町村も多く、さらには仏、伊、独への学びの旅から自立の村作りの多くのヒントを得て来た。連合が継続的な学習活動で展開している自立の村作りへの先進事例を紹介する。人々の営みがあって、多様性のある美しい村が維持される。自分たちのことは自分たちで決める、自立した村づくり。資格審査は日本・世界の先進事例を相互に学び合う場でもある。自給・循環型経済、地域経済の自立と住民自治で、地域にお金が残るようにする。リピーターは人々の交流と多彩な料理の味が魅力で増える。若者の雇用ビジョンが必要で、特色を出し、真の豊かさを探ることだ。

3. 地方消滅から地方創生へ 山下祐介 (首都大学准教授)

人口減少は「選択と集中」という人々の心 の問題である。都市化したところでも出生、子 育てできるようにすることが先にある課題だ。今は東北地方でも出生率が急減している。都市の人々は農山村への支援を自覚し、住民と行政は相互依存的に協働しながら、自立をめざすべきだ。

4. 地域(場)の伝統知に学び、暮らす〜ムラを開いて広くつながる社会へ〜

1) 総合討論 ① 序列意識/価値から外れるという考え方 A: やりたい人がやりたいことをするので、固定的にリーダーはいない。ボトムアップ的な仕組みでチーム作りし、序列はない。トランジションで世界とつながるが、具体的な活動で地域をつなげる。 B: 序列社会で生きてきて、疑問ももったので、美しい村の活動に加わり、別の人生の満足感を求めた。「村のエスプリ」、地域を守るために、住民によるコンビニ、地元で買い物をし、よそでお金を使わないようにする。 C: 住民と行政のコミュニケーションが少ない。助成金は必要だが、依存してはいけない。 ② 小菅村と都市との交流の現状 A: 多摩源流まつりを行う中で、ビジョンを策定した。源流親子事業(教育再生)で、8 世帯 20 名が移入してきた。 ③ 学校がなくなると、若い人が来なくなる A: 村を変えるのは I ターン女性だ。地域おこし協力隊員は 3 年後にどうするのか。職場を作る必要がある。コンサルタン卜への丸投げはよくない。住民が参画して構想を練るべきだが、役場職員が住民に協力を求めない。 B: 小菅村では都市との交流はできている。未来思考、幸せと思えること、教

育が大事だ。地域おこし協力隊員が自立できるか。④村の一員として、排除の論理が働かないように、どの段階で受け入れを認知するのか。Iターンだけではなく、Uターンの在り方も考えるべきだ。⑤共通する考え方「依存し過ぎない、自立する」、「自発性、内発性」：ボランティアな活動が個性、多様性のある地域の在り方を形成する。自立というのは適度な妥協はするということで、反抗的ということではない。「序列」：たとえば、大学も序列社会である。その中において、個人として信条に従い、意見を述べ、必要があれば抵抗もし、行動する。心を閉じるのではなく、半開きにしておき、柔軟に対応する。学びの場を維持し、生涯学習の機会を拡大する。「学びの観光」、エコスタディ・ツーリズム。

2) まとめ 都市民は、健康で幸せであるために、自然の一員としてのヒトの暮らし方、素のままの美しい暮らしを農山村民から学ぶのがよい。地域（場）で長老たちから暮らしの技能を体験的に学び、手間暇かけて、自給の不便から学び、暮らしのあり方をゆっくりと自分で納得しながら、より良く変える。このためには、農山村民はムラ社会（実は都市も含めて、日本の社会組織の一般性質）をより開放的にせねばならない。こうして、農山村民と都市民の確かな連携、協働ができれば、永続する暮らしのあり方を探りながら新たな文明へと向かう可能性が開ける。この可能性を具体化する実践事例が、世界各地で行われている地域（場）で学ぶ活動において展開されている。

### 第 37 回環境学習セミナー

2016 年6 月25 日（土）、山梨県小菅村中央公民館

**テーマ**：山村の生物文化多様性と豊かさ～都市住民が山村住民から学びたい生業＋職業＝楽しみの人生～

**趣旨**：現在、人口700 人余の小菅村では、源流の郷やエコミュージアム日本村など、村づくりの取組みが継続的になされてきました。これまでの経験の蓄積を学び直し、また、他地域の優れた経験とともに学ぶためのセミナーにしたいと思います。大きく変わろうとする世界のなかで、このくにをどのように再創造をするのか。まずは、地域社会学と日本史の視点からの話題提供をもとに、自然と向き合ってきた山村の豊かな暮らしを再認識し、深く考えるために、親密な話し合いの場をご一緒しましょう。

**参加費**：資料代など1,000 円（小菅村民無料）、懇親会費3,000 円 宿泊（1 泊朝食）6,500 円

**主催**：NPO 法人自然文化誌研究会、エコミュージアム日本村／ミュージーズ研究会

**共催**：NPO 法人ECOPLUS

**協力**：東京学芸大学環境教育研究センター

**後援**：小菅村、小菅村教育委員会、小菅村商工会、小菅村観光協会

**助成**：公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業助成

**プログラム**：

6 月25 日（土）

12：30 ～ 受付開始（小菅村中央公民館）

13：00 ～ 13：20 趣旨案内と挨拶 青柳諭（ミュージーズ研究会代表）

13：20 ～ 14：20 「『白神学』の経験から一地域を知ること、継承すること、またそのことの難しさ？」 山下祐介（首都大学東京・准教授、地域社会学・環境社会学）：地域を守る人とはだれなのか、誰がどういう形で、その土地の歴史や文化を継承していくの

か、白神山地の山村から考えましょう。

14:20 ~ 14:30 休憩

14:30 ~ 15:30 「山の恵みに彩られた山村の暮らし」白水智（中央学院大学・教授、日本史・山村史）：山には多くの資源があり、住民はそれを活かす多様な知識や技術をもって豊かな暮らしをしてきました。大震災に見舞われた長野県栄村（秋山郷）における文化財を活かした復興支援活動についても紹介します。

15:30 ~ 15:40 休憩

15:40 ~ 16:40 意見交換会など

16:40 ~ 17:00 まとめ 木俣美樹男（東京学芸大学名誉教授、民族植物学）

18:00 ~ 20:00 座談会（広瀬屋旅館）

**講演1**：「首都圏から見た地方創生—人口減少社会をどう捉えるか？—」

山下祐介さん（首都大学東京・准教授、地域社会学・環境社会学）

**講演1の要旨（講演資料より）**：

首都圏から見た地方創生—人口減少社会をどう捉えるか？— 山下祐介（社会学）

1. 地方消滅から地方創生へ

- ・日本創生会議の増田レポート（2014年5月、選択と集中を含む）から端を発する。  
→人口減少と東京一極集中が問題化 ⇒地方創生（まち・ひと・しごと創生）へ（2014年9月）

- ・12月に長期ビジョン、総合戦略を発表。同じく問題は人口減少←東京一極集中を阻止する。だが——なぜか、地方創生の中心は「地方に新たな仕事づくり」に。（経済→人口）。しかも東京本部で号令して。（東京一極集中を東京一極集中で阻止する）。しかも競争で。自然淘汰（選択）になる可能性も？（競争させて消滅？）でないと国全体が潰れる。これで果たして、人口減少は止まるのか？いったい何が起きているのか？

2. 人口減少社会の正体

ともあれ人口減少の正体を探ってみる・・・①都市化要因説：まち・ひと・しごと創生長期ビジョン、総合戦略の前半

- ・東京一極集中によって、人の生まれにくい大都市に若い人が集まりすぎている。→地方に若い人をとどめて子育てできるようにしないと、この国が持たない。

↓ところが、実際にやっていることは、まずは地方の仕事づくり。↓これは、

②低経済要因説：総合戦略の後半、基本方針、総合戦略改訂版

- ・地方に仕事がないから、若い人が残らない。だから人口が減る。まずは仕事づくり。

- ・ローカル・アベノミクスの推進、稼ぐ力を付ける、一億総活躍（95年基本方針、改訂版へ） ↓人口減少は高開発国の問題、東京で低出生率が問題の出発点だったのに①と②は相容れない。事実をふまえれば①を取るべき。

- ・問題は経済問題ではない。社会的心理的問題。しかし、たしかに地方で人口減少の理由を聞くと「仕事がない。」

**講演2**：「山の恵みに彩られた山村の暮らし」

白水 智さん（中央学院大学教授）

前近代山村の生業と支配のあり方 これまでの歴史学でほとんど取り上げられてこなかった山村地域の村について調べています。山村は今や過疎地の象徴と見なされています

が、山には多くの資源があり住民たちはそれを活かす多様な知識や技術をもっていました。山の恵みに彩られた山村の歴史的な姿を追っています。

激甚災害時の文化財保全のあり方、2011年に大地震に見舞われた長野県栄村に通り、震災後に廃棄されそうになっていた古文書や民具を救出する活動を行ってきました。今も現地に通い続け、文化財を活かして文化面で復興を支援する活動をしています。

### 第38回環境学習セミナー

「自然と暮らす知恵と技能を学ぶ。山村の生活技能・環境学習（冒険学校）」「暮らしを創造する生きる力を生む冒険、自然体験」

2016年9月3日（土）～4日（日） 山梨県小菅村役場および中央公民館、自然文化誌研究会拠点のキャンプ場（小菅村内）

**趣旨：**自然文化誌研究会は、秩父多摩甲斐国立公園とこの周辺にある山村で環境学習活動／冒険学校や雑穀調査研究、これらの成果を応用して、エコミュージアム日本村／トランジション小菅など、山村維持の取組みを40年あまり続けてきました。現在、精神性さえもがデジタル化されようと大きく変わりつつある世界のなかで、自然とつながるアナログ的な伝統的知識・技能が過疎高齢化によって決定的に失われようとする変曲点にあります。現実世界が仮想世界に蔽われようとするこの時代に、私たちアナログ自然・文化好きの冒険人たちはこの巨大な趨勢にどう抗うのか。自然と直に向き合ってきた山村の豊かな暮らしを再認識しながら、私たちが生活する人生を深く考えるために、親密な話し合いの場をご一緒しましょう。自然学校・冒険学校などで培ってきた経験の蓄積を学び直し、私たち市民がこのくにをどのように再創造しながら、未来に向けて実体のある生活様式をどのように維持するのか、ともに学び、考えるためのセミナーにしたいと思います。

**参加費：**資料代など1,000円（小菅村民無料）、懇親会費2,000円、宿泊費：キャンプ場1泊朝食（自炊）2,000円、旅館1泊朝食6,500円

**主催：**NPO法人自然文化誌研究会、エコミュージアム日本村／ミュージアム研究会

**共催：**NPO法人ECOPLUS

**協力：**東京学芸大学環境教育研究センター

**後援：**小菅村、小菅村教育委員会、小菅村商工会、小菅村観光協会

**助成：**公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業助成

**プログラム：**

9月3日（土）

12：30～ 受付開始

13：00～13：20 趣旨案内と挨拶 中込卓男（自然文化誌研究会代表）

13：20～14：20 「暮らしを創造する生きる力を生む冒険、自然体験」佐々木豊志（くりこま高原自然学校）

14：20～14：30 休憩

14：30～15：30 「小菅村の自然、知恵と技能」木下善晴（建設業・小菅村80代）  
加藤源久（自然ガイド・小菅村60代）

15：30～15：40 休憩

15：40～16：40 意見交換会（テーマ：人生が冒険でなかったら、どこに生きる意味があるのか。困難に挑戦してこそ面白い人生だ！）

16:40 ~ 17:00 まとめ 中込卓男 (自然文化誌研究会代表)

18:30 ~ 24:00 夜の部 (自然文化誌研究会拠点のキャンプ場:小菅村小永田地区の伝統芸能である「神代神楽」が奉納され、見学可)

9月4日(日)

8:30 ~ 11:30 伝統技能実技講習 講師:木下善晴、加藤源久

**講演1:**「暮らしを創造する生きる力を生む冒険、自然体験」

佐々木豊志 (くりこま高原自然学校)

山村で自然学校を経営ながら、2008年「岩手宮城内陸地震」に遭遇して非常時の環境学習(サバイバル)の意味を、身をもって示した。さらに、この経験を活かして、東日本大震災が起こった時には、災害ボランティアセンターを立ち上げ緊急支援体制を構築した。最近、世界的にも、自然学校がいわゆる「ディズニー化」しており、冒険心まで演出されることを危惧している。幼少期の自然体験の重要性から森のようちえん、さらに自足可能な暮らしを想像するために森林資源利用から木質バイオマス、馬搬など復権と取り組んでいる。

**講演2:**「小菅村の自然、知恵と技能」

木下善晴 (建設業・小菅村橋立地区)、加藤源久 (自然ガイド・小菅村東部地区)

**講演2の要旨(加藤源久さんの講演資料より):**

「小菅村の概要と自然」

#### 1-1 どんな村か

山梨県の東北端に位置し、東京都奥多摩町に接する県境の村。東西14km、南北7km、総面積5265ha、その95%を山林が占める。村域の多くが首都を還流する多摩川の源流域にあり、一部が相模川水系となっている。村のキャッチフレーズの一つは多摩・源流で、多摩川流域市区町村との交流を村づくりの核においている。また、全国で最も早くヤマメの人工養殖に成功した村で、「ヤマメの里」の愛称もある。現在、3軒がヤマメ、イワナ・ニジマスの養殖を手がけ、東京、埼玉方面の釣場などへ出荷している。村の名前のいわれは、村内にイネ科の菅が多く自生しており、これを材料に菅笠を産出していたことによるといわれている。同じ小菅の地名が長野県飯山市にあり、ここも菅の産地。

#### 1-2 村の歴史

縄文中期から後期の土器や石器などが村内の各所から出土している。年代が判明している中で最も古いのは長作観音堂で、大同2年(807年)に創建され、その後現在の地へ移されたという。現在の建物は鎌倉時代に建てられたもので、その建築様式ほかから、国の重要文化財の指定を受けている。室町時代には、武田の家臣「小菅遠江守信景」が役場の後ろに居を構え、多摩川及び相模川水系の葛野川の源流域一帯を支配下においていた。信景は武田信玄の三代前の人。また、この頃の歌人、壬生忠峯(小倉百人一首の歌人の一人)は、「甲斐の国 鶴の郡(こおり)の板野なる しら玉こすげ 笠を縫うらん」と詠んでいる。

江戸時代は徳川幕府の直轄地で、村内の多くが御巢鷹山で、大切に森林保全がされていた。村の人口は、明治以前は1,000人前後、大正時代から増加し、昭和30年には2,244人とピークに達した。その後、都市への流失で人口減少が進み、平成28年9月1日現在は740人、しかも65歳以上の高齢者が45%を占める、超高齢の村となっている。

#### 2-1 自然の特徴

村の標高は、奥多摩湖湖面の535 mから大菩薩連峰の妙見の頭の2,057 m。本州中部で、山地帯から亜高山帯に属し、コナラ・ミズナラ・ブナなどの落葉広葉樹を主体に、一部がシラビソ・コメツガなどの針葉樹林帯となる。首都から80km圏内にありながら、江戸時代の御用林、明治以降の水源涵養林として保全がされていたため、樹齢200年以上の巨木が多く残り、様々な動植物が見られる。

## 2-2 代表的な動植物

希少種としては、哺乳類ではカモシカ・ヤマネ、鳥類ではクマタカ・コノハズク・クロジ、両生類ではナガレタゴガエルが生息している。山地帯の動植物のほとんどがみられ、鳥類は500種中115種、哺乳類は122種中30種以上、蝶類は206種中70種以上を確認している。源流域に属する小菅川に本来生息していた魚は、ヤマメ・カジカ・アブラハヤ・ウグイ・ウナギの5種で、イワナは古い時代に移植された可能性が大きい。なお、昭和32年の奥多摩湖の完成以降、下流部では魚種が大幅に増えている。

[花] レンゲショウマ・アツモリソウ・ヒカゲツツジ・カタクリ・シュンランなど

[蝶類] オオムラサキ・コムラサキ・アサギマダラ・スギタニルリシジミなど。

[魚類] ヤマメ・イワナ・ニジマス・アブラハヤ・カジカ（全域）/ ウグイ・オイカワ・アユ・ハス・ナマズ・ヨシノボリ・ヌマチチブ・カワムツなど（下流域）

[両生類] ハコネサンショウウオ・ヒダサンショウウオ・ヒキガエル・モリアオガエル・ヤマアカガエル・カジカガエル・タゴガエル・ナガレタゴガエル・アカハライモリなど

[爬虫類] ヤマカガシ・アオダイショウ・シマヘビ・マムシ・ジムグリ・カナヘビ、ヤモリなど

[鳥類] オオルリ・コマドリ・ヤマセミ・オシドリ・アオバト・ミソサザイ・フクロウなど

[哺乳類] クマ・サル・イノシシ・シカ・キツネ・アナグマ、タヌキ、イタチ、オコジョ、ムササビ・モモンガ・ウサギなど

・動植物の一部を写真49 枚で紹介

[花] カワラナデシコ・ナツズイセン・マタタビ・トリカブト・マムシグサの実

[果実] モミジバイチゴ・クワ・オニグルミ・ミズキ

[山菜] フキノトウ・タラノメ・コゴミ

[茸] アミガサタケ・タマゴタケ（初期/ 中期）・シャカジメジ・コウタケ・マツタケ（初期/ 中期）

[蝶等] テングチョウ・アオバセセリ・ミヤマカラスアゲハ・オオムラサキ・ミヤマカワトンボ

[魚] ヤマメ・天然ヤマメ（群泳/ 産卵）・イワナ（産卵沢/ 産卵）・ニジマス（産卵）

[両生類] モリアオガエル（卵塊）・ナガレタゴガエル♂ / 卵塊・オタマジヤクシ）・カジカガエル

[鳥] コジュケイ・ヤマセミ（巣穴）・ハシブトガラス・マガモ・ツミ幼鳥♀

[哺乳類] キツネ・疥癬病のタヌキ・サル・シカ・カモシカ

・サケ・マス類の稚魚：源流域を代表する魚がサケマス類、この仲間の大きな特徴の一つが稚魚から幼魚（10cm 以内）の時期は、体側面に小判型の斑紋が見られること。この斑紋はパーマーク（和名は幼魚斑）と言ひ、ヤマメだけは成魚になってもパーマークが見られる。サケマスの稚魚は酷似している。イワナ→ヤマメ→ニジマスの稚魚。

・鎌倉蝶 小菅で見られる黒いアゲハチョウは、クロアゲハ・カラスアゲハ・オナガアゲ

ハ・ミヤマカラスアゲハの4種類。

鎌倉蝶は、関東甲信越の一部地域で呼ばれていた黒いアゲハチョウの古名。鎌倉幕府の滅亡時の争乱で6,000人以上の武士が戦死し、その直後に三浦半島一帯で大きな黒いアゲハチョウの群飛・乱舞が見られ、戦士した武士の魂の化身だという説話に由来した呼び名。小菅でも50代以上の人は「カマクラチョウチョ」と今でも呼ぶ。

ちなみに、クワガタの仲間は小菅では「ガジワラ」と呼び、鎌倉幕府の後家人「梶原景時」に由来するという。

#### ・迷鳥と自然の変遷

翼を持つ鳥は意外な場所へも飛来する。特に台風の直後などには、海辺の鳥などが小菅も見られることがある。（釣場のポンドで泳ぐウミネコ、春の渡りの時期に金風呂に来たヤツガシラ、釣場に来たダイサギ）

昭和53年以降、小菅に住み自然の変遷を記録している。ブッポソウ・ノジコ・コサメビタキが姿を消し、トビ・カワラヒワ・アオサギ・カワウなどが進出してきた。中でもハクセキレイはここ30年で全国的に分布を広げ、小菅でも普通に見られるようになっている。また、温暖化の影響からか、南方系のツマグロヒョウモンが普通に見られるようになっている。皆さんも身近な自然に興味を抱き、簡単な記録を残すことを薦めます。

### 第39回 環境学習セミナー 伝統知シンポジウム

～農山村の環境と生活文化から学ぶ 都市との交流～

2017年4月15日（土）～16日（日）神奈川県相模原市緑区（旧藤野町）の「篠原の里」

**趣旨：**日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが消滅する寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落に蓄積されてきた伝統的知識体系や技能には現代的にも高い価値があり、「持続可能な社会づくり」には不可欠であることが明らかになってきている。自然だけではなく、身近な土地からさえも切り離されて世代を重ねた都市部の住民にとっては、この知恵や技能を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考える機会を極めて有効である。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要がある。

本事業では、3年次計画で実際の伝統知学習プログラム展開をしつつ、この新たな交流実践の姿を描き出す試みをしてきた。本シンポジウムでは事業成果を報告し、さらにこの成果を社会的に位置づけるために他の先進事例も紹介し、生活における伝統知や技能の大切さとその継承による、健全なライフスタイルについて、農山村と都市からの参加者ともにゆったりと話し合いたい。

幸いなことに、開催地の藤野は日本のトランジション・タウン活動の中心であり、シュタイナー学校やパーマカルチャー・センターもある。素のままの美しい暮らし（sobibo）へとライフスタイルを変容するために学ぶための良い実践が蓄積されている。これらの文化的財産をもとに、これからの私たちの生活や人生の先行きを明るく直観できるような統合概念をともに発見し合いたい。

**主催：**NPO 法人自然文化誌研究会、NPO 法人エコプラス

**共催：**エコミュージアム日本村（トランジション小菅）／ミュージーズ研究会、トランジション・タウン藤野、トランジション・ジャパン

**協力：**東京学芸大学環境教育研究センター

**後援：**小菅村、農業生産法人藤野倶楽部、藤野観光協会

**助成：**公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業助成

**プログラム：**

4月15日（土）

1) 基調報告

・伝統知を生かした交流と学びの場：高野孝子（早稲田大学教授）

2) 伝統知研究会報告

・苦役を学びに：大前純一（エコプラス事務局長、新潟県南魚沼市）

・伝統知～知恵と効率化：黒澤友彦（自然文化誌研究会事務局長、山梨県小菅村）

3) ポスター・セッション/ 話題提供

・新たな持続可能な文化の生成について：設楽清和（パーマカルチャー・センター代表）

・境界のまち「藤野」の社会的な価値：高橋靖典（トランジション・タウン藤野、藤野倶楽部）

・信州の自然と農と教育：渡辺隆一（信州大学特任教授）

4) 座談会風の総合討論・交流会

4月16日（日）

・シンポジウムのまとめと藤野まち歩き「藤野サステイナブル・スポット・ツアー」

司会：末村成生（トランジション・タウン藤野）藤野という里山地域に根づきつつある持続可能で身の丈に合った暮らし。その具体的な営みを体感できるスポットをぶらっと見学してみませんか。パーマカルチャーやトランジション・タウンの実践現場をご案内します。

・事業について

伝統知研究会は、国土緑化推進機構の助成を受けて6年間の調査研究、普及事業を進めてきた。その成果をシンポジウムとして開催した。なお、この『都市民と農山村をつなぐ仕事と学びの創造 Creative Learning of Traditional Knowledge and Subsistence』～農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流～に関する調査研究報告書もある。

**事業名：**農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流～持続可能な社会を目指して

**概要：**日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが忘れられる寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落の技術や知識には、現代的な課題となった「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに残されていることが明らかになってきている。土地から切り離されて世代を重ねた都市部の住民には、この技術や知恵を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考え直す機会が極めて有効である。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要がある。

本事業では、実際のプログラム展開をしつつ、この新たな交流の姿を描き出す。

**期間：**平成26（2014）年7月から平成29（2017）年6月まで

**対象区域：**山梨県丹波山村、小菅村、上野原市、神奈川県相模原市緑区、新潟県南魚沼市

助成：公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業

事業主体：特定非営利活動法人自然文化誌研究会

協力：特定非営利活動法人ECOPLUS

伝統知シンポジウムの要旨（報告者資料より）

#### ・基調報告

「伝統知を生かした交流と学びの場」高野孝子（早稲田大学教授）

日本の農山村の多くでは、自然から持続的に恵みを取り出す知恵や、自然に近い生活から生まれる哲学や洞察が長年受け継がれてきた。近年、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化に伴い、そうした伝統知やライフスタイルそのものが、集落や人々とともに消えようとしている。

自然文化誌研究会とエコプラスを中心とした調査研究チームは、何百年と暮らしを維持してきた集落の技や知識には、「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに残されていることを前提として、都市と農村住民の交流プログラムを実施し、過去3年に渡ってデータを収集した。それは、単なる「自然体験」ではなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流であった。そうした機会を通して、参加者が伝統知についてどのような価値を見出したか、都市であれ農村であれ、持続可能な社会づくりの手がかりとなるかを考察した。

#### 伝統知研究会報告

「苦役を学びに」大前純一（NPO 法人エコプラス事務局長）

私たちが活動をさせていただく新潟県南魚沼市の山里は、4mを越す雪が積もる豪雪地帯である。冬場は毎朝のように玄関前に腰までの雪が積もり、その除雪（雪掘り）だけでもくたびれる。夏場、山の斜面に広がる美しい棚田は、田んぼよりもあぜの傾斜面の面積の方が広いといわれ、村人は6月から9月まで、あぜの草刈りに追われる。どちらも「苦役」でしかない。その雪掘りは都会の人間からすると、スキーとはまったく違ったアクティビティになる。草刈りで絵文字を描けば「草刈りアート」だ。参加者は、体を動かし、蓄積した技を教わり、人々が何百年にもわたって積み重ねてきた暮らしを学ぶ。そこから改めて都市化し近代化した私たちの暮らしを見つめ直し、持続可能な未来を考える。わずか数十年しか経ていないいまの私たちの暮らしの姿をよりよくするために、改めて足もとを見直すときだ。

「伝統知～知恵と効率化」黒澤友彦（NPO法人自然文化誌研究会事務局長）

「知恵」は身に付けることであると思う。小菅村に移住して12年、豊かな自然と文化、伝統的な知恵に囲まれているという実感があり、訪れる人もそう言う。自分の日常を考えてみると、「生業」をこなしながら暮らしている＝職業である案内人だけでなく、プレイヤーという側面もあり、正直、田舎暮らしもなかなか忙しい。だが自分自身がプレイヤーであり、身の丈に合った部分をこなしていくことは、回数を重ねるごとに自信を生み出すものでもあると思う。

自分の「生業」に関して本音を言えば、実は楽しみではない、早く片付けたいと思っているのが「生業」であつたりもする。私個人の日常で言えば「生業」はこんなところ。

- ・薪割り（薪ストーブ燃料）～チェーンソー、斧の活用、保存方法、冬支度
- ・畑作～生鮮食品、穀物類の確保
- ・狩猟（趣味と義務）～山を知ること、解体作業、蛋白源の確保。副次的に、有害鳥獣駆

## 除による森林の保全（側）

日常生活の中で大きく3つの生業を常に抱えており、これは自分自身と自然とをつなぐ接着剤。同時に、楽しみというよりはなるべく作業を効率化することにより熟練度が上がり、余暇が増える。仕事と捉えずに、仕事の合間に、日常の合間にて行うこと。

すべてに共通することは、肉体を活用することと、自然と関わることなので、健康維持という側面も持っている。健康維持を考えれば、自動的に肉体を鍛え維持すること、効率化を常に図り頭を働かせるということで知恵を磨けるという環境＝システムに包まれている。実は生業によって、伝統的な知恵の習得がなされている訳で、感謝すべきものであるということが、自然への感謝の気持ちであろうか。

想定外の災害や、未曾有の自然災害が起きる可能性のある中、伝統的な知恵を身に付けておくことは必須であると思う。小菅村のような山村にいる限り、電気が止まろうとも、ガスがなかろうとも、命をつなぐことは可能だと思う。自分自身の手の届く範囲にエネルギーや食材が存在するからだ。農山村の伝統的な知恵を継承することや学ぶことは、農山村の維持のためではなく、生きていくための知恵を学べる場所として、ぜひ活用していただくのが農山村と都市の双方にとって良いのだろう。そして、そのようなプログラムをこれまでに展開してきた。日常的にかかわる全ての伝統知をやりきることは難しいので、個人で必要な知恵を考え、厳選していく必要もあるだろう。

### ・話題提供

#### 「信州の自然と農と教育」渡辺隆一（信州大学教育学部）

「みすず刈る信濃」といわれる長野県は日本の屋根である。県歌、信濃の国に詠われているように4つの平らに住む人々は豊かな自然に恵まれ農業も盛んで、豊かな自然を背景に「農」を基本とした多様な山村文化が各地に見られた。長野市の近郊でも、戸隠村は神社信仰とそばが、鬼無里村では麻や雑穀の栽培が盛んであり、ブナの森に囲まれた野沢温泉村では正月にブナのやぐらを組んだ盛大な火祭りが今でも行われている。

しかし、現代社会はこの信州においても経済発展が主題であり、自然へのまなごしは極めて少ない。私たちの生活は表面的には金銭の経済であるが、深層では地域の自然や文化を土台にしているのであり、それらを踏まえずには「持続可能な社会・地域」は成立し得ない。世界経済に遠い中山間地においては急速な過疎化が進行しており、特に子どもたちの数は減少し、全校数十人という中学が多数ある。すると小中学校が廃止されて、村は急速に過疎化する。これはやむをえないことなのであろうか。

かつての長野県の山間地では子どもが数人の集落であっても分校などの名で小学校を維持し、学校を核とした地域が維持されていた。戦後の復興もそうした教育の力によって支えられて来たといってもよい。環境教育を（1977年以來）永らく行ってきてわかったことは、様々な環境問題を紹介し地球の危機を訴えても個人の行動にはなかなかつながらない、心と体の成長期である小学生ほど環境に関心が高く、また危機感を持っていることの2点である。とすれば、子どもは地域の中で遊び、大人はその中で地域の課題を提示するという共育の仕組みを再構築するしかないのではないかと思う。

近年、子どもたちの体験が重視されるようになってきたが、単に自然に触れさせるだけではなく、自然体験を地域課題として社会化することが大切である。小学生でも現地でギフトチョウを見てその素晴らしさに感激するとともに、その環境や地域が開発や過疎といった社会関係の中にあることを見出し、自分たちに何ができるかを考え始める事例ができてき

ている。中学年以上になれば自然や環境を論理的に見る力もあり、地域や自然を様々な関連の総体として認識できるようになる。同時に、自然も社会も文化もみな関連していることを直感的に理解できることであろう。

野外での体験は、理科的な自然観察に終わるのではなく、確実に地域の課題学習につなげることができる優れた教材である。地域の自然を個々の自然物として見るだけではなく、その自然が育んできた地域の暮らしと文化、そして地域の歴史、さらに人類が歩んできた進化の過程まで大きな歴史の流れとして、過去を学ぶことが、未来にどんな地域を創造してゆくのかの知恵と工夫の源泉になるのだと思う。

#### 「新たな持続可能な文化の生成について」設楽清和（日本パーマカルチャーセンター）

パーマカルチャーとは持続可能な生活をベースにしながらか地域コミュニティとそこに生じる文化を生成していくことを目指しています。グローバル化によって地域の文化は自然とともに破壊され、人は自らのアイデンティティの拠り所と、生活の安定を失ってしまいました。地域の特性とそこに生きる人々の地域の資源を用いて生活のレベルを高めていく創造力により築かれてきた文化の街を見直し、それらが内包する様々な知恵や技術を未来に向けて生かしていくことが、これから私たちが取り組むべきことであると考えます。パーマカルチャーを通して見いだすことができるこれらの文化の様々な特性を明らかにするとともに、これらを生かして地域づくりを行っていく実践についての報告を行いたいと思います。

#### 「境界のまち〈藤野〉の社会的な価値」高橋靖典（トランジション藤野・農業生産法人藤野倶楽部）

藤野は首都圏からみると、車でも電車でも約1時間～1時間半。都内で仕事を持っていても、なんとか通勤ができる場所に位置しています。地形としては中山間地域であり、平地の少ない山間の地域で、大規模な農業をするには不利な場所です。移住や経済という視点からこの地域を見た場合には、本当に奥まった田舎までは移住できないケースで、消費地でもある首都圏とのつながりも持った上で暮らせるエリア、自然の多い田舎エリアへの境界線のまちとも言えるのではないかと考えています。そんなまちで考えられる役割と取り組みについてお話しさせていただきます。

##### ・藤野現地ツアー案内

小山宮佳江（NPO 法人トランジション・ジャパン共同代表／トランジション藤野メンバー）、末村成生（トランジションタウン藤野お百姓クラブ）

#### 第40回環境学習セミナー 雑穀街道とFAO世界農業遺産セミナー

日時：2018年4月9日（月） 場所：山梨県上野原市役所 展示室3

参加者：関心ある方々どなたでも

参加費など：無料

主催：NPO 自然文化誌研究会／雑穀街道普及会 共催：農業法人藤野倶楽部、NPO さいはら、ほか プログラム 12:00～13:00 受け付け、地域活動の展示紹介 13:00～14:00

##### 1. 雑穀街道の提案趣旨

雑穀街道普及会 木俣美樹男（農山漁村文化協会理事、東京学芸大学名誉教授） 14:00～15:00

2. 各地域からの報告 1) 小菅村・丹波山村から黒澤友彦 (NPO 自然文化誌研究会事務局長、雑穀栽培講習会) 岡部良雄 (雑穀栽培農家) 2) 上野原市西原から 富澤太郎 (上野原市農業委員、やまはた農園) 中川智 (雑穀栽培農家) 3) 相模原市緑区藤野から宮本透 (宮本茶園、雑穀栽培農家) 15:00~15:10 休憩 15:10~16:00 総合討論とまとめ  
藤村達人 (相模原市農業委員、筑波大学名誉教授)

目的: 伝統的な農作物在来品種をめぐる農耕文化、栽培、加工、調理、儀礼などは、縄文時代以来の祖先から継承してきた、現在も生きている大切な文化財です。この山村の生活を豊かにし、健康長寿を支えてきた生物文化多様性がとても大切にされている地域が、私たちの暮らしている関東山地中部地域です。雑穀に象徴される山村の農作物を未来にまで継承するために山梨県丹波山村から神奈川県相模原市緑区までを「雑穀街道」と呼んで、FAO 世界農業遺産に登録申請したいと思います。関係市村長に賛同が得られれば、5月下旬~6月初旬に、雑穀街道協議会を発足させ、申請書を協議、6月中旬には申請書を完成して、6月下旬の期限までに提出することが望まれます。